



Title	日本古代における暦法の研究 [全文の要約]
Author(s)	吉田, 拓矢
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15057号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85417
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Takuya_Yoshida_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：吉田拓矢

学位論文題名

日本古代における暦法の研究

日本では、古代・中世・近世を通じて、太陰太陽暦が使用されてきた。その計算方法が「暦法」である。本稿では、従来の研究では考慮されることが少なかった古代の暦法の計算結果を積極的に活用することで、日本古代における暦、および時間支配の実相を検証した。

第1章「日本古代における暦法の施行と運用」では、従来、政治的行為として説明されてきた新暦法採用や暦日操作について、その実態を明らかにするとともに、そこから指摘し得る、天皇の時間支配の特徴を論じた。日本古代においては、新暦法採用に政治的意図があったとする積極的な論拠は見出されず、暦日操作とされる例も、暦法を遵守したものに過ぎない。それよりも、元嘉暦と儀鳳暦との併用、大衍暦と五紀暦との併用など、暦を管理統制しようとする意識が低かったことが窺われる。日本では暦を改める論理として観象授時が強く意識されていなかったからこそ、仮に暦法が天体運行と整合せずとも、そのことで天皇の権威が損なわれることはなかったのであり、このことが、日本古代における暦法のありかたの特質と見ることができる。

第2章「日本古代における日蝕予報」では、7世紀末から10世紀までを範囲として、日蝕予報の方針とその特質を明らかにし、日蝕予報を職掌とした陰陽寮暦博士の技能を論じた。従来、日蝕予報があまり的中しないことから、暦博士は技能が未熟であったとされる。しかしながら、延喜18年（918）までは、もとより蝕が現れることを想定していない、「夜蝕」が予報されていた。的中率が低いと評価されてきたのは、夜蝕予報を誤算と見做しているためである。8世紀から9世紀中葉にかけての日蝕予報は、暦法をもとに計算した結果としては妥当であった。ただし、貞観4年（862）に宣明暦が施行されると、「月が陽暦に在るときは不蝕」という法則が理解されず、それ故に日蝕予報には誤りが多くなり、的中率は極端に低下した。10世紀中葉に葛木茂経が現れるま

で、暦博士は予報精度を改善することができなかった。

補論「日本古代における時刻制度と日月蝕」では、48 刻制・50 刻制・100 刻制と複数の時刻制度が併存する中で、日月蝕予報にはいずれの時刻制度が用いられるのかを検証した。日本古代においては、日常に浸透しているが宣明暦と対応しない 48 刻制、宣明暦と対応するが日常に浸透していない 100 刻制、そして両者を折衷した 50 刻制が、各々に機能していたと見ることができる。

第 3 章「日本古代における夜蝕」では、夜蝕予報や廃務がどのように運用されていたのかを明らかにし、そこから指摘し得る、日蝕廃務の特徴を論じた。夜蝕とは日没してから始まり日出までには終わる、いっさい観測できない（仮想の）日蝕である。中国においては、いっさい観測できない天文現象を予報しようという発想はなかったが、日本では、そうとは知らず、夜蝕予報が出されていた。天長 8 年（831）には夜蝕予報を中止した陰陽寮が咎められ、以降、夜蝕予報は必須となる。ついで元慶元年（877）には、夜蝕にも廃務が必要であるのかが文人官僚に諮問され、三者三様の提案がなされたが、夜蝕廃務は必要との結論に至り、あわせて前月晦日の夜蝕でも朔日に廃務をするのが例となった。この運用は、天体運行との不整合を許容するもので、夜蝕廃務はしつつも、天子として天文異変に対峙しようという意識は希薄であったと評価できる。さらには、日蝕予報が倍増し、政務や儀式を中止・延引させていたことから、延喜 18 年（918）に夜蝕廃務が止められ、夜蝕予報も消滅した。

第 4 章「9 世紀中葉から 10 世紀にかけての造暦と争論」では、造暦の特徴や正権暦博士による争論の実態を検証し、当該期における技能水準や暦道内部の様相を論じた。宣明暦採用を推進した暦博士大春日真野麻呂は宣明暦を熟知していたと推察されるが、つづく暦博士家原郷好には推算法に誤解があり、それが後進に引き継がれた。10 世紀に入ると、より初歩的な誤謬も散見され、技能にいっそう低下が認められる。このような暦算における誤りが、争論を生じさせる要因の一つとなった。10 世紀を通じて、正権暦博士には 6 度も争論があったが、うち 5 例は、宣明暦をどのように運用するかを巡って対立したもので、暦博士は各々に宣明暦を遵守しようとしていた。また朝廷は、優れた技能を有する暦家を積極的に登用した。

第 5 章「暦道と宿曜師による造暦—10 世紀中葉から 11 世紀中葉にかけての暦から—」では、従来、賀茂氏が暦道を掌握できた要因の一つと評価されてきた、宿曜師との

連携について論じた。10世紀には、大春日氏と賀茂氏から一名ずつを出して造暦が進められていたが、両氏とも人材が豊富であったとはいいがたく、暦博士が没して造暦が滞ることもあった。宿曜師に対して造暦宣旨が下されたのは、暦家が不足する中でも造暦を維持していくための方策と解される。なかでも宿曜師証昭には、日月蝕予報を改善することが期待されるも、その成果は現れなかった。さらに、証昭は賀茂氏と造暦に関して争ったが、つねに賀茂氏が勝ち、造暦における優位を確保していく。賀茂氏は、宣明暦を的確に計算できるだけの技能を有するとともに、朝儀との関係にも配慮していた点において、造暦に長けていたと見ることができる。

第6章「暦家賀茂氏とその技能—11世紀中葉から12世紀中葉にかけての日月蝕予報から—」では、暦家賀茂氏が正権暦博士を独占して以降、暦道・宿曜道・算道が各々にいかなる技術水準にあったのかを明らかにし、賀茂氏が暦道を世襲化したことが、技能に及ぼした影響を論じた。当時、宣明暦を利用した日月蝕予報には、「蝕が予測よりも遅れる」という傾向があった。ときに暦道はこれを考慮に入れ、時刻を補整して予報を作成したが、そのことが必ずしも的中率を高めるとも限らなかった。12世紀には、予報を巡って暦道と算道および宿曜道との争論が多発し、しばしば暦道は敗れている。ただし、これは宣明暦そのものの精度に起因した敗北であって、宣明暦を計算したり、その結果を解釈したりすることにおいては、暦道が他道よりも優れていた。賀茂氏が暦道を世襲化したことの影響は、技術を低迷させる方向ではなく、習熟させる方向に現れたと評価できる。

以上の検証を通じて、日本古代においては、君主の時間支配の理念がそれほど強くは意識されていないことに気付く。しかし、暦法が帯びていた政治性が相対的に希薄であったからといって、天行と合わない暦が容認されていたわけではない。暦も一つの先進技術である以上、精確な暦を希求する意識は普遍的なもので、先例を尊重しつつ政務を進める目的からも、より精確な暦本、より優秀な暦家が要請されるのは必然であった。儀式との調整も図りつつ、暦を天行に合わせようと努めた暦家たちの姿、そして彼らに高度な暦算技能を求めた朝廷や貴族たちの姿は、いずれも日本古代を通じて不変であったといえる。